九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

青少年育成事業に見る手法と特徴、その効果と課題

軸丸, 勇士
大分大学教育福祉科学部

伊藤, 安浩
大分大学教育福祉科学部

岩切, 義和
大分県教育庁生涯学習課

洲崎, 洋昭
NPO法人　エー・ビー・シー野外教育センター

他

https://doi.org/10.15017/19968

出版情報：生活体験学習研究. 8, pp.63-72, 2008-02-12. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第８号　63－72（2008）

青少年育成事業に見る手法と特徴、その効果と課題

軸丸勇士　伊藤安浩　岩切義和
洲崎洋昭　松本睦美　西山　隆

Techniques and Characteristics of the Youth Educational Program and its Effectiveness and Future Challenges

Zikumaru Yushi・Ito Yasuhiro・Iwakiri Yoshikazu
Susaki Hiroaki・Matsumoto Mutsumi・Nishiyama Takashi

要旨　平成18（2006）年に大分県内で実施された青少年育成に関する各種事業の中から特徴ある３種類（民間会社主催の100kmウォーク、市教委主催・ＮＰＯ法人委託の海外研修を含めた野外体験活動、セーリングクラブ主催のディンギー操艇）を紹介する。

これを通して、この種の児童生徒の体験活動に関する事業を行う際の支援の仕方や関わり方、そのための指導者、指導者と子どもとを結ぶ人材、これらを含めたプログラムのあり方、効果や課題等について生涯学習と体験学習の視点から述べる。

Abstract　We introduce three characteristic activities (100 km walking, outdoor experience activities and yachting) out of various programs for bringing up youth, which were put into effect in 2006.

Based upon this experience, we discuss how to support and concern ourselves in this kind of children's experience activities, and how to make a program for training leaders in this field and men and women capable of linking those leaders and children, its effect and problems from the point of view of learning by experience.

Ⅰ　はじめに

平成13（2001）年に学校教育法及び社会教育法が改正され、各学校等がボランティア活動等の社会奉仕体験活動や自然体験活動など、多様な体験活動に努めることが規定された。その時を同じくして、子どもゆめ基金がつくられ（その管理運営は独立行政法人国立青少年教育振興機構）、国と民間が協力して子どもの体験や読書活動などを応援し、子どもの健全育成の手助けを資金援助している[1)]。

また、平成14（2002）年７月には中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」がまとめられ、青少年の時期には学校内外における奉仕活動・体験活動を推進する等、多様な体験活動の機会を充実することが必要であると提言されている。

文部科学省ではそれらを受けて、平成14（2002）年度より「豊かな体験活動推進事業」を実施し、各都道府県に「体験活動推進地域・推進校」を指定して他校のモデルとなる体験活動の推進を図ってきた。さらに平成15（2003）年度からは、都市部から農山漁村や自然が豊かな地域に出掛け農林漁業体験や自然体験を行うなどの、異なる環境における体験活動促進のために「地域間交流推進校」を指定した。その上、平成16（2004）年度からは長期にわたる集団宿泊等の共同生活体験を行う「長期宿泊体験推進校」を指定するなどし、これらの各種体験によって学び得られる多くの豊かな資質（人間性や社会性など）を期待した[2)]。

連絡・別刷り請求先（Corresponding author）
大分大学教育福祉学部（〒870-1192　大分市旦野原700）
Faculty of Education and Welfare Science, Oita University (700 Dannoharu Oita City, Japan 870-1192)

以上は学校での各種体験事業であるが、社会活動としては自己資金のものから前述の子どもゆめ基金や民間などからの援助を受けて実施するものなど、多種多様な体験型事業が開催されている。その中でも毎年夏休みになると年間単独事業のうち、９割近くが青少年育成に関連したもので、各都道府県の色々な場所で開催されている。これは個々人の居住地域により異なるが最も長い休みである上、寒さ対策が殆ど必要ないことから簡単にできる利点が大きいためにこの時期に集中している。それを実施する参加者は小単位として個人か家族、仲間や友人であったり、多人数になると子供会等の各種団体から自治体主催のものまである。その人数は２、３人から何百人規模であり、それに応じて様々な手法や場所、日数や内容で開かれている。又、この他にボランティア事業なども増加傾向にある。特に最近は企業が独自の方法により有料で開催し、色々な特徴を生かして、それを売りにしている事業者も増え、参加者も多くなっている。

しかし、昨今の市町村合併に伴う地域の広域化は予算の不足、旧市町村での均等開催の必要性、多人数時の会場確保の難しさ、担当者の人事異動により事業が少なくなった自治体の例も多くある。その上、急な気象変化に対応できなかったため発生した事故や適切な判断ができなくて避難が遅れた場合、準備不足や過労、熱中症、不注意等による各種のトラブルもあり、指導者や主催者の責任問題まで問われたりして、必ずしも積極的ではなくなっている現実もある。その一方で塾や習い事だけで遊びと言えば屋内でのテレビゲーム機しか知らない子ども達の増加は社会問題にもなってきた。少子化や環境の変化に伴う戸外での遊びや体験の少ない子ども達を少なくするために、共同生活しつつ各種体験を組み込んだ事業を行いながら、お互いの個性の伸長とそれを認め合うことの大切さを学ばせることなどを目指した自治体（地教委）主催の通学合宿等の事業もかつては多く実施されていた[3,4]が前述の理由等により昨年度から半減している。

そのため、本稿では平成18（2006）年に大分県内で開催された事業の中から、特徴ある３種類の子ども育成事業を取り上げ、その手法と特徴、及びその効果と課題について体験活動から見た児童生徒の変容と今後の課題を述べる。

Ⅱ　具体例

１．歩こうおおいたチャレンジ100km

(1)　目的と特徴

これは株式会社大分放送（以下ＯＢＳという）が主催し、平成15（2002）年８月上旬の１週間、子どもの健全育成の一環として始まったもので今年で５回目を迎えた。小学生12名が指導者と支援の大学生等と共に炎天下の中、大分県内の市町村を100km（実際はそれ以上）、苦労しながら目的地まで歩き通すテレビ番組（ドキュメンタリー）撮影のために始めたものである。

それへの参加希望者は県内各地から初年度は50名程であったが、年々増加し５回目の今年は130名を越えた。その人選は健康診断、個人面接や集団面接、運動等によって行なわれ、応募者の中からＴＶ撮影に合った特徴ある参加者（出演者）を見つけるため各分野の10名がそれに当たる。この様にして個性溢れる子ども達が選ばれ、実際に参加できる小学生は４～６年生各学年から男女２名ずつ、合計12名が決まる。

しかし、選出されたとは言え12名は同じ学校でないため全く互いの情報はない。出発日に指定場所に集合してお互いに顔を知ることになる。将に急仕立てに等しい。これを１時間程でまとめてきちんと全体として動き、指示連絡が確実にとれるようになるためには指導者２名の手腕と共に、それを支援する大学生４名の力量や連携姿勢による。なんとか形だけの歩行部隊の出発であるが、100km歩くという目標を持って参加している者達だけに、時間の経過と共にお互いの意志の疎通ができるようになり、指導者からの指示の伝達が速やかになってくる。初日の夕方になれば１年間一緒に過ごした学級のように和やかな、そして役割分担や協働による作業が可能になってくる。これも指導者は勿論のこと、支援者としてその年に参加した大学生の経験とその力量によって決まる。

(2)　実施と支援

歩行事業のスタッフは大学生４名と筆者等の指導者２名から成る。この６名は常に子どもと一緒に行動し、寝食を共にする。また、全ての運営（指揮監督、食事や休憩など）は指導者に一任され、それを支援する学生と連携しながら実行している。にもかかわらず、本稿に挙げた他の事業と異なり、とにかく、互いに協力

しながら自力で、各種テーマを消化しながら目的地まで歩き着かねばならないので、時には気象条件や道路状況、子どもの体調等により時間が遅くなることもある。

この他、歩行に同行するのは看護士１名、ＴＶ撮影の３クルー（９名と３台の車両）とその支援車２台（２名）、雷など緊急事態対応の小型バス１台（１名）から構成されている。しかし、これまでに撮影クルーと支援車の小さなトラブルはあったが、判断が的確・迅速であったこともあり、ウォークを中止するような大きな急病、怪我、落雷、交通事故などなはい。そのため、同行の車両を緊急用で使用したことはない。

歩行に必要な物の中で水だけはこの支援者（車）から時折補給を受ける。歩行中、汗をかくせいか水の使用料は一人１日平均して４Ｌを越える。

年度別のテーマ（豊後水道の秘密を探る、仏の里くにさきの修行僧の足跡を尋ねて、海抜０ｍから九州の最高峰1791ｍ登頂、日本の生んだ作曲家・滝廉太郎の生まれ故郷から九州の最東端をめざして）のもと、大分県内の市町村を６泊７日かけて歩き通す。

この12名の参加者はＴＶ出演のため参加経費や保険料などの経済的負担はなく、食事や宿などの必要な物は主催者が設定し一応の用意はある。だが、宿泊のための寝場所の確保や清掃、室内外での炊飯の準備から片づけ、テントの設営や撤収など参加者自らが指導者や大学生と共に行わねばならない。また長期にわたって移動するために洗濯なども各自で行う。また、各種施設の状況や環境、天候等に応じて、様々な遊びや各種体験、学校の宿題や個人研究なども組み込まれている。

この事業の時期としてテレビ撮影に好ましい天気が安定している８月上旬に５年連続して実施してきたが、年によっては５日間雨であった場合などもある。しかし、何れの場合も苦難を乗り越えて100kmを歩くことは完遂されている。

朝を除き気温は30℃を越える炎天下の下、遅くとも９時頃から（昼食と何回かの休憩を含み）16時頃までの間に10kg程の荷物を背負い、晴雨にかかわらず１日につき平均20km程歩く。平坦な道だけでなく山道や坂道を、ひたすら自分の足と体力を頼りに走破せねばならず、その間に様々なトラブルが発生する。それをどの様に解決しながら一行を進めるかが指導者の手腕でもある。しかし、ＴＶ撮影クルーにとっては子どもや一行の中に突発的に発生する色々なできごと、それに伴う対応や対策、参加者の動揺などが逆に好材料になるので特に忙しい。

その撮影を通して参加者の人間性、協調性や助けあいの姿、疲労による苦悩や葛藤などを映像で赤裸々に伝える。それを乗り越えて協力し、助け合いながら目標のゴールを目指す様子は、ドラマでなく現実におきたことであり視聴者に大きな感動を与える。それに参加したその年の12名は自信と勇気と達成感、寝食を共にした仲間の友情と一人ではできない協力や連携の大切さを実感すると共に自然の営みの偉大さを知る。特に最終日になると、必ず誰からともなく今日を最後に別れねばならない現実を気にし出す。そして歩いていても小休止の時間を見つけてはお互いの住所の確認やら電話番号の教え合いが始まる。ゴール後は１週間寝食を共にしてきた仲間達との分かれを惜しむ光景が次から次と各所に見られ、かけがえのない友人としてそれぞれの脳裏に刻み込まれていく。

(3)　成果

この様にして１週間にわたり各地を歩き、学んだり挫折しかけたりした、その時々の様子が３～４台のカメラにより撮影され、20日程の編集を経て、ＴＶ映像として夏休みの終わる８月末の日曜日に１時間の特集番組として放送される。参加した児童の通学する学校は勿論のこと、地域住民をはじめとする県民の100kmウォークに寄せる関心が年毎に高まってきた。この番組に対する直接の視聴率調査が行われてないから定かではないが、その前後の週での時間帯や関心などから推して、少なくとも15％を越え、場合によっては20％に近いのではないかと予想されている。この放送を視聴した子ども育成の関係者が録画したこの100km歩行のビデオテープは各地で開かれる子ども健全育成の研修会や討論の場で活用される。また、年末には１年間のアンコール番組の一つとして放映されるまでになっている。

それに参加した子ども達や親は単に１週間一緒に歩いただけで終わらせるのではもったいない。折角培われた友情と交流を大事に持ち続けていきたい。そのた

めには参加者が県下各地に散らばっているので子どもだけでは集まれない。そこで、親や家族達が協力して自由参加による交流を目的にした「億歩会」が２年目から始まった。それへの出席者はその年だけでなく、参加した年度を越えて年に１～２回集まり、同窓会的な交わりが続いている。これは主旨が汗を流しながら目標に向けて一歩一歩近づくために、参加者の協力や連携を基にした、精神的に成長することを実践を通して学ばせる事業であるためで、近年特に希薄になった人間関係の再構築に向けて、異色のものへと発展している。むしろこの事業は単に100kmを歩くだけでなく、その後の親子や家族の交流が今後の様々な発展に繋がる可能性を秘めたものになろうとしている。この交流と親睦を目指し、家族を含めたこの「億歩会」は事務局の役割を果たす者が次々と自然発生的に生まれ、その時に担当できる者が旗振り役となり、それを中心にして色々な展開が始まり続いている。そのため、今年も８月末に開催された億歩会への参加者は実際に歩いた者とその家族など110名、これまでにこの事業に関わったＯＢＳの社員（撮影したカメラマンやプロデューサー等）や支援の学生、看護師、指導者（筆者）等20名で、合計130人を越えた。その億歩会に出席した５年間の参加者は１年ぶりの再会を喜び、今回からの初参加者とも和やかな話が続いた。写真１に今年の参加者を加えて完歩を称え歓迎すると共に、億歩会の１人として今後の活躍を誓う子ども達を示す。１年経って再会すると、心身共に成長した子どもの姿は目を見張るものがある。

写真１　2006年夏の億歩会に集まったこれまでの参加者達

その一方で近い将来これに参加した者が補助者やリーダー、指導者となってこの種の事業を企画実行できる力量の蓄積を行っている。それができるようになることが実際にこの事業を行い指導してきた筆者や保護者は言うに及ばず、多くの関係者から期待されている。

２．中学生海外体験研修事業

これは平成17（2005）と18（2006）年度に大分市教育委員会（以下、「市教委」という）がＡＢＣ野外教育センター[5]（以下ＡＢＣという）に委託し、実施した事業である。参加者は大分市内の中学２年生を対象に市教委が募集し、小論文と面接により選ばれた男女20名からなる。派遣先はオーストラリア（以下ＡＵＳという）、現地での滞在期間は夏休み中の３週間である。

(1)　目的

この特徴は単に海外研修の体験として終わらせるのではなく、ＡＢＣが行っている「冒険教育」の手法を事前研修の中で体験し、「仲間」とのチームワークや信頼関係、「何事にもチャレンジを楽しむ気持ち」を涵養した上で、生徒達を海外へ派遣するところにある。海外での体験活動も単なる物見遊山の観光に終わらせるのではなく、広大な大地の中で営まれる農業や大自然の中で行われる動物とのふれあいをはじめ、現地での学校や高齢者施設の訪問・交流などに重点が置かれている。宿泊形態も農場に直接泊まる「ファームステイ」や現地の人と寝食をともにし、異文化に直接触れる「ホームステイ」を基本としている。更に帰国後は、自分達の体験を振り返り言語化し、それを他者に伝えるための手法としてプレゼンテーションの仕方等も学びながら、自分達の経験を次世代に伝えていくところまで視野に入れて実施した事業である。これを図１に示す。

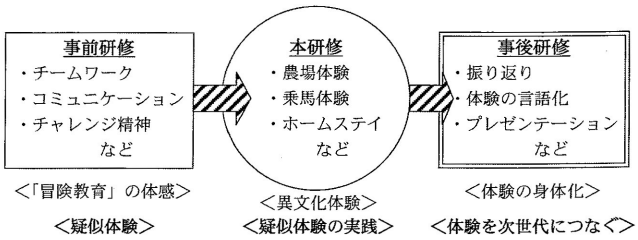

図１　事業の構成図

(2)　研修

①　予備研修

合計５回の事前研修では、学校も性別もバラバラな20人が少しずつ互いを認め合い、自分の殻を破りありのままの自分を出せる環境作りから始まった。アイスブレーキング（以下ＩＢという）と呼ばれる手法で、一見ゲームに見える活動を通して名前を覚えあったり、失敗すらも楽しむ雰囲気を作り出していったりするものである。例えばひもの上に全員が乗り全員の両足が離れないようにしながら、「誕生日順」などの、課題に合わせて並び変わる。ここでは参加者同士の関わりや支え合いが生まれ、失敗を乗り越えながら問題を解決していく気持ちが養われてくる。更に「言葉を使わずに」といった条件を加えることで、非言語的なコミュニケーションについて体感するきっかけともなる。

ある生徒の感想の一部を見ると、この瞬間のことを「…はじめ『無理だ』と思いました。…　でも何度もやっていくうちに少しずつまとまり出したのが判った。…私は声を出さずに、ここまでできるとは思っていなかったので本当にうれしかったです…」と記述している。Ａ４用紙２枚分になる全体の感想（本研修を含む）の中で、10行にわたりこの時のことを描写していることからもこの体験が如何に印象に残っているかを推察できる。

ＩＢの活動と連動しながら徐々に「チームワーク」や「チャレンジ」が必要な活動に移っていく。「大きなシーソーの上で全員が協力して平衡を保つか」「木と木の間に通したワイヤーの上を全員が落ちずに目的地にたどり着けるか」といった活動を繰り返すうちに生徒達はいつしか自分の考えを述べ、他者の言葉に耳を傾けるようになっていた。

さらに「クライミングウォール」と呼ばれる高さ７ｍ程の垂直な壁を命綱をつけて登ったり（写真２）、地元の大学に来ている留学生との交流を行ないながら、「チャレンジ精神」や「言葉を越えた人との交流」の基本体験を持たせた上での出発となった。

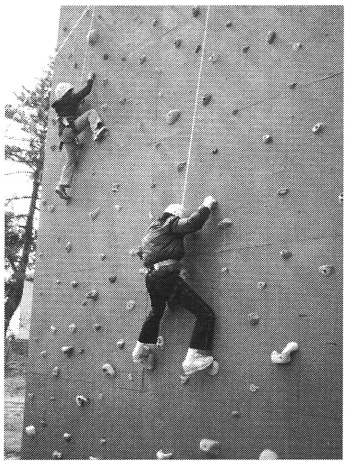

写真２　協力して垂直な壁を乗り越える

②　本研修

３週間にわたるＡＵＳでの本研修は事前研修を担当した洲崎等に代わって松本等が行った。そのＡＢＣ野外教育のコンセプトを導入した海外研修は３部分から成り立っている。

１つ目の牧場滞在中の乗馬では、自分が映画に出てくるカウボーイのようにさっそうと草原を走る姿を想像していた者達も、実際に馬を目の前でみたとたん表情が一変する。そのまま立ち竦んでしまう者、自分よりも高い馬の背を見上げながら腰が引けて泣きそうな子、馬がたづなを引っ張る力に慌てる生徒など、様々な中学生の姿があった。その時に初めて「自分が関わっていることや思っていること」と「実際にできること」との間に大きなギャップがあることに気づく。

その様にぎこちなくスタートした乗馬も日を追うごとに参加者の表情には得意そうな笑顔が見えてくる。小さな挑戦を繰り返しながら少しずつ自信が積み重ねられていくからであろう。最終日の６時間かけての長距離騎乗では、自分の馬をしっかりとコントロールしていく子ども達の姿があり、その表情は大草原を背景にまぶしくさえ感じた（写真３）。

２つ目はＡＢＣ野外教育センターと同様のコンセプトを持つＡＵＳの野外教育施設での体験である。日本で体験したことを基に今度は環境の違うところで再挑戦する。グループからチームへ成長しつつある子ども達へ、改めて相手を尊重すること、協力・信頼すること、集中力そして、自主性がテーマとなっている（写真４）。

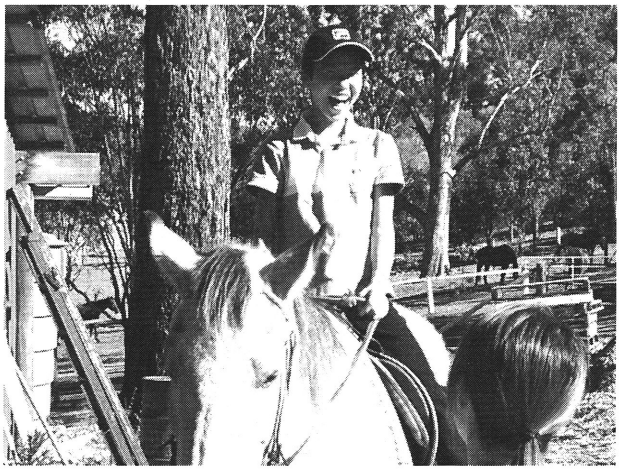

写真３　２日もすると馬にも馴れ人馬一体の笑顔が

写真４　全員で現地にある資材を集め、筏を作り川を渡る

ハイロープなどの地上７ｍの位置に水平に張ったロープ渡りに挑戦するプログラムでは、自分の意志が一番大切にされるため、進むも戻るも自分で決定していく過程を何度も繰り返し体験する。「上りますからお願いします！」「ちゃんと支えるから大丈夫！」というお互いの信頼が転落防止のために下の者が支えるロープ（命綱）を伝わってくる。身体と心、渡る者と地上から支える者を一つにして進む。一歩一歩の動きはまるで「尺取り虫」が怖じ怖じだが正確に歩を進めるかのようである。風や日光など刻々と変化する自然条件の中での体験は自分の確かな状況判断と決断力、集中力、そして一緒に支えあう仲間を思いやる心の大切さも学んでいく。

その一つ高張りロープをやっとの思いで渡り終え、何とか地面に降りてきた途端、思わず仲間達の前にへなへなと座り込む子、ドキドキした思いを堰を切ったように仲間にしゃべりだす者、ここにもそれぞれに違った体験のドラマがある。

３つ目はチームと離れ２人１組となり体験するホームステイ。これまで各自が学んできた、生きていく上で必要とされるスキル、仲間づくり、コミュニケーション、問題解決、協力・信頼など、体験を通じて身につけてきたことを身近なところで使っていくための舞台となる。ホストファミリーと対面するとき、何て言う？　英語での挨拶は？　自己紹介は？　どんな感じの人たち？　自分の英語が通じる？など、一番ドキドキワクワクする瞬間となる。習慣や生活スタイル等、日本での事前研修で学んだことが実践の中で一つずつ蘇り生きてくる時となる。もともと歓待する心に富んだ国民性で知られるＡＵＳの人たちは構えず、子ども達を自分の家族の一員として迎え入れてくれる。２、３日も経つとホストファミリーの言うことが判る、自分の伝えたいことを解かってくれるようになった、と嬉しそうに話す者達が増えてくる。「あなたのことをわかりたい」「私のことをわかってほしい」との双方向のコミュニケーションの構築が自然とできるようになる。

この年間プログラムを通じて各人が学んできたことは「正しい答えを教えてもらい実践する」ことではなく、「正しく答えを考えていく過程」、そして（生徒の言葉を借りれば）、“新しいことへ挑戦する勇気”、挑戦と成功（達成感）を繰り返していく“楽しさ”にあると言える。その詳細は大分市教委とＡＢＣが協働して作成した報告書『大分市中学生海外体験研修事業[6]』に生徒の感想と共に記されている。それを見ると参加者20人のイキイキした挑戦から学び、変容への姿が描かれている。彼らは大陸の広さに驚くと共に食事、ライフスタイル、学校生活、南半球の自然などあらゆる角度から「世界」を感じ、結果として郷土「日本」を省みている。しかし、これを読んでいると、何よりも彼らが感じているのは「仲間」の存在と「チャレンジをすること」の重要性であることに気がつく。ある生徒は「私が１番学んだことは『何事もはじめから諦めず挑戦すること』です」と述べ、別の生徒は後輩達に向け「積極的に行動することが大切だと思います」から始まる、５行に亘るメッセージを残している。

③　事後研修

帰国後、２回りも３回りも大きく成長した彼らが、「是非、自分達の体験をみんなに知って欲しい」という熱意から自分達で、パワーポイントの使い方まで勉強しながら全て自分達で作りあげるプレゼンテーションの準備を始めた。この間に大人がやったのは研修場所を確保しておくことと、日程の案内を送ることだけで生徒達は自分でチャレンジを続けていった。平成18（2006）年２月４日、大人の方が緊張する中、20人の中学生達は堂々と自分達の体験と成長の軌跡を語った。保護者やそこにいる大人達の中には思わず目頭を押さえ、子どもの成長を改めてみる程の報告会であった。その際の研修生代表の挨拶の一部を以下に引用する。

「…この研修で一人一人が学んだものは何だったのか。『感謝する心』『仲間のありがたさ…』しかし、20人全員が学んだ中で一番大きかったもの、それは『新しいことに挑戦する勇気でした』。20日間色々な事に挑戦したからはっきりとそう言えます。今後はこの経験を色々な場面に生かして、更に成長を続けたい…」

(3)　まとめ

最初の事前研修に集まった時、彼らはけだるそうで、他者とも関わりを持とうとはせず、「ただ外国に行ってみたいだけだ。何でこんな面倒なこと（研修生同士で関わり合う事）をさせるんだ」と言いたげな表情をしたり、実際に口に出して言う者もいた。研修中異性どころか、同性の研修生とでもなかなか手をつないだり、話したりできない状況で、できるだけ目立たないように自分の意思を表明しなかったが、周りが何か言えばとりあえず従うような状態だった。先に述べた事後研修のときの姿など微塵も見えなかった。

教育の分野で１つの事例や体験だけを取り上げ、その結果の行動としてとらえることは非常に難しい。子どもたちは日々多様な体験を重ねているからだ。それでも、今回のこの研修が少なからず彼らに影響を与えていることはその後の感想や行動からも見てとれる。

それでは何が彼らにこのような変化を及ぼしたのであろうか。以下の３点に整理できる。まず１つは他者との関りを持つことが難しくなってきている今日の日本において、他者との協力や意見の刷り合わせがどうしても必要となる。しかし、この種の野外活動の体験が従来の価値観を越え、より創造的で活力に満ちた世界を作り出した。

２つ目は言葉も従来の常識も通用しない異文化環境の影響である。海外に出ることで生きざまも感性も習慣も異なる人々と出会い人生観や世界観が覆される経験をした。

最後に「人」と「人」との交流である。どれだけ「異文化」といっても「心」で通じ合える体験をし、そのためには自分の気持ちを伝えることと同じくらい相手のことをわかろうとする必要がある。また、海外という異空間で同じ言葉で悩みや体験を共有できる仲間とのやり取りも重要な要素である。

ただし、いずれも「やってみよう」「話しかけてみよう」「挑戦してみよう」というチャレンジ精神があってこそ成り立つものである。生徒達が感想の中で語っているように、「事前研修」からの流れがあることで本研修が生き、本研修が充実していたからこそ、事後研修で彼らが自らエネルギーを発揮したと言える。

(4)　課題と展望

平成18（2006）年度は昨年度の大好評を受け２年目が始まっている。２期生達も既にＡＵＳでの研修を終え、これから事後研修に入っていくところである。昨年この研修に参加し、成長したリーダー達は事前研修で「ホームステイの心得」や「自分達の体験」を語るために、各地から駆けつけ種々の支援を自らの経験を生かしてやってくれた。事後研修でも各種のサポートをしてくれている。このように大分市では自分達の活動に誇りを持った中高生が後輩達と関わり共に成長し、次はそのリーダーになっていくという循環的な人材育成への取り組みを始めている。これから彼らをどう巻き込み、地域のリーダーとして根付かせていくか、彼らが高校生や大学生になった時、どんな関わりを持つか持たせるかが今後の大きな課題でもある。

３．一人乗りヨットの帆走と操艇

(1)　目的

「子どもゆめ基金」からの資金援助を受け、平成17（2005）年度より始めたこの事業は一人用ディンギーというＯＰ級ヨット（写真５、全長2.31m、全幅1.13m、重量35kg)の帆走技術の習得を通して、単独行動で

の自己責任と自助努力の気概を培う。また、出艇や着艇時の共同作業を通じて助け合う気持ちや海の楽しさと共に怖さを体感させ、自然との共生について考える五感の養成を行う。さらに、自力で状況判断し、それに基づいて行動し、自己責任の心を養うと共に、周囲10kmの大入島（離島）を使って自然を活用した子どもの健全育成をめざした事業である。

写真５　恐怖と戦いながら一人ディンギーを操る

(2)　特徴

様々な体験活動の中で「自己判断と自己責任」を目的とした活動を安全面に配慮しながら提供することは現実的には困難を極める。さらに、集団活動の中で個人の行動を自己判断に委ねながら全体を指導することは容易ではない。

広い大海原で１人ひとりが個人の判断で自然の風を読み、波を乗り越えながら舵を操り、目的地に向かって進むディンギーの操艇は前述の目的に適したこの上もない体験活動ができるものである。海という障害物のないフィールド故に可能なことではあるが、指導者は全体を一望しつつ、状況に応じて判断し各種の指示を出しながら行わねばならない。その上、自然が相手なだけに何が突発的に生じるかの予測が立たず、命の危険と隣り合わせでもある。そのため、救援体勢と支援者との連携が最も重要になる。参加者はライフジャケットを装着することで、海に落ちても溺れることはない安心感を持たせながらも、危険防止のために指導者の指示を確実に守ることと緊急時の対応・連絡などの手法を徹底しつつ体験させねばならない活動である。

(3)　操艇実習

大分県佐伯市の大入島を中心にして「１人乗りディンギーで周る大入島」（４泊５日）として実施したものである。２回目となるこの事業には佐伯市内をはじめ、大分市や別府市の小学校４年生から中学１年生まで13人（男子９人、女子４人）が参加した。参加者は一般公募のため、地域や年齢も異なり体力や知識に大きな違いがある。更に前述のように各種体験がなく、ワンタッチや接着式の道具や製品が普及してきたこともあり、かつてのように紐（ロープ）の結び方もまともにはできない状況である。従って帆の固定や船の係留などに必要な各種ロープワークや海上の交通ルールなどを実践と講義形式で学ぶことから開始した。結び方はちょっとした要領が判らず苦労するが、何回も練習を繰り返し行うことで、操艇と固定に必要な最低限数種類の結び方は何とか修得した。また、海上交通ルールは机上での学習だけでなく、実践を通して必要に応じて修正し、５日間でその都度復習することによりマスターできた。

１人に一艇ずつ与えられたディンギーを自分の判断で風向きや潮の流れを読みながら操艇し、最終日には参加した児童生徒全員が大入島の一周を目指した。

模範帆走の見学から始まり、ブイ周り、本船ブイ周り、彦島（付近の小さな島）一周等と活動が日々ステップアップする中で、参加者の上達の早さには主催者も驚くほどだった。しかし、３日目の彦島一周ではブイ周りとは勝手が違うためか、数艇が遅れ４年生の女の子が不安で泣き出した。そのため指導者が舷側に近づき声をかけ、併走しながら教えると何とか自力で操艇し始め、海上での孤独さと闘う姿と指導の難しさを垣間見た。その様な紆余曲折はあったが、日を追うごとに写真６のように全員が率先してヨットを運ぶようになり、互いに協力する心も醸成されてきた。

参加者は初日から集中するのは無理なのか、暑さの中で仕方がないのか、周りの海やクラゲ等が気になり、隊列から離れたりした。そのため主催者は近くの浜辺で水泳させたり、上手に活動できた時には浮き輪遊びをさせるなど、楽しみながら自然と水に慣れ親しむ工夫をしなければならなかった。さらに、最終日の８月６日は広島原爆の日の黙祷を済ませてから出帆するなど、平和学習も組み入れている。また、佐伯海上保安

署の巡視艇「さちかぜ」の内部を見学したり、同署員からロープワークや離岸流の話などの安全講習を受けるなどして、参加者が自然との共生を図りかつ日頃から海の安全への心掛けの必要性などを学んだ。

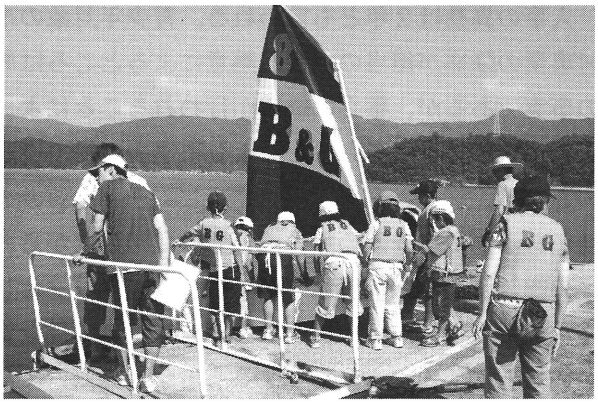

写真６　全員で協力して艇を運び海に浮かべる

最終日の大入島一周の折（写真７）、風が弱く時間が大幅にかかったため、全艇の曳航を指示して港に帰ろうとした際、引き波で大きく揺れる中、各艇共諦めずに一生懸命風や潮と格闘する様には感動した。時間はかかったが何とか目的を達成し、上陸後の解散式で１人ひとりに修了証書を手渡した時には安堵と共に、充実感や達成感に満ちた顔となっていた。そして、参加者全員が来年の参加を希望していることも判った。

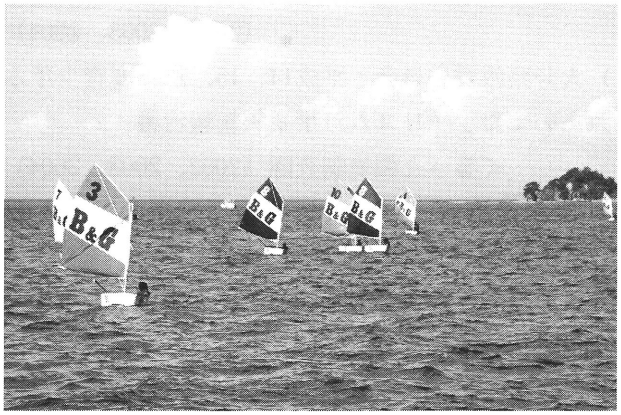

写真７　ディンギーを操艇し周囲10kmの大入島を廻る

(4)　成果

セーリングクラブの特性を生かしたこの企画は、安全に海（水）と楽しむ心を養うと共に臨機応変に自分の的確な判断の下、物事に対処することの大切さを学ぶものとなった。これは参加者が達成感や成就感を明確に体験できる事業であるといえる。

この背景には、17名のスタッフが連日交替しつつも、最終日には自らが所有している５艇のヨットを操り、救助艇と共に安全を確保しながら指導にあたる体制が整っていることが揚げられる。これは海に関わる者の持つ相互扶助の心によるものである。

保護者は「誰にも頼らずに大自然に向き合うことは、子どもにとって貴重な体験である。全てを自分で受けとめ判断するという体験を通して以前より積極的になったように感じる。スタッフの安全面にも配慮した献身的な指導に感謝する」と言葉を寄せている。

(5)　課題と展望

セーリングクラブが広く周知されていないこともあり、口コミを含めて20名の募集に対して13名の参加であった。しかし、予定した定員（20人）には満たなかったが、この広い海上での掌握のしやすさや声の届きやすさなどから考えれば、十数名の人数が力を合わせての作業や班編制もしやすく、結果的には上手くまとまりやすいことも判った。

また、２年目は佐伯市教育委員会の社会教育課の管轄である本匠冒険クラブの生徒の参加に伴い、社会教育主事２名の参加があり、この体験事業の成果と重要性が教育行政にも認知され、今後の拡がりも期待できるところとなった。

課題として、専門的知識を備えた指導者の全員が仕事の関係から５日間連続して参加者と一緒に活動できないため、入れ替わり立ち替わりの指導となり、不足部分や重複箇所も発生した。今後は全日程の指導を行える者をおく必要があると共に、その種の指導者の養成が求められる。今年の参加者全員が来年も希望していることから、事業を継続することにより参加者がやがて指導者となる日の訪れることが期待される。

Ⅲ．結果と考察

ここに述べた３種類の実施主体は自治体とＮＰＯ、企業、クラブである。しかし、実施した各種事業は何れも体験を基本にしながらも、それぞれ特徴ある方法による心身の成長と人材育成を目指したものであると言える。それ故、創意工夫による今後の継続こそが、これからの青少年の健全育成に繋がり期待できるもの

となる。以下に３事業の優れた共通点とこれからの方向性について述べる。

１．体験活動プログラム自体の力

３種類の事業の内容は異なるものの、プログラム自体が魅力的である。

①　目的が分かり易い…「100km歩く」「挑戦を楽しむ海外研修」「１人用ヨットで島を一周する」参加者にとっては、簡単で明確なそして日常と異なる場面が用意されている。

②　自然を活用している…自然が相手であり、「自然の素晴らしさ」「自然の厳しさ」に直接目を向け、その中で自己を律する力と協力が必要となる場面が現れる。

③　集団と個人のバランスがとれている…集団で協力しなければならない状況が必然的に起こる。また、個人の判断と責任を担う場面も生じる。そのバランスが絶妙である。

２．予算面

ここに挙げた３事業の費用は民間（企業）、自治体、補助金により成り立っている。これだけの活動を、受益者負担で賄うことはかなり困難であろう。全て参加費だけで実施するとすれば、どれだけの参加希望があるのかは未定である。

テレビ番組としていつまでスポンサーが付くのか、また自治体の場合は年度予算は年々減少し、補助金は削減される場合もあり、どれ程の期間継続するのかの疑問も残る。とは言うもののこれらの事業は前述の効果を上げていることは事実である。それ故、今後はプログラムの精選とボランティアの活用等により、スリム化した予算の中で事業の継続を図り、ある程度の受益者負担で参加できる体制づくりを考える必要がある。

３．人材育成

企画する者、専門性を備えたスタッフ（コーディネーター、各活動の指導者）、サポーター（一般、大学生、高校生等）など、体験活動を支えるには多くの人的体制が不可欠であり、これ等の人材をどう育てていくかも大きな今後の課題でもある。10歳の小学４年生が高校１年生になるには６年間が必要であり、成人になるには10年である。教育行政の事業は通常３年周期であり、人事の異動は２年とも言われる。青少年対象の市町村事業の隆盛が担当の力量と熱意によるところは周知の事実であるが、事業の継続が行われることによって人材が育成でき、そのことにより事業も継続できるものとなる。

特色あるプログラムの魅力改善を常に図りながら、事業の継続により参加者がやがてチームスタッフとして後進の指導にあたる人材となる時、青少年の健全育成が成果として現れる。そうすることが理論だけでなく体験を通した子どもの心身の発達を助長することになる[7]。それ故、筆者等はその実現へ向けて微力を注いでいるところである。

参考文献

１）子どもゆめ基金ホームページ：
http://yumekikin.niye.go.jp
２）地域間交流促進に関する研究会：地域間交流の促進に関する調査研究（文科省2006）
３）大分県教育委員会：平成14、15、16年度大分っ子「社会力」パワーアップ事業実施報告書
（2002、2003、2004）
４）大分県教育委員会：平成14、15、16年度青少年ふれあいエコツーリズム21事業実施報告書
ぐるっと環境調査隊（2002、2003、2004）
５）伊藤安浩他：日本生活体験学習学会誌　７号（2007）29
６）大分市教育委員会：平成17、18年度　大分市中学生海外体験研修事業（2000、2001）
７）生涯学習審議会答申：「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」
（平成11（1999）年６月９日答申）